

群馬大

ICT推進で共同体

群馬大学は学内に蓄積した情報通信技術（ICT）を教育機関や医療機関、企業などの外部と共有し、ICTの活性化を推進する組織「ICTデータサイエンスコンソーシアム」を立ち上げた。県内外から参加者を広く募集する。コンソーシアムの会長に就任した浅尾高行副学長に設立の狙いと展望を聞いた。

ICTデータサイエンスコンソーシアム



会長 浅尾 高行氏

学内資産開放し活性化

「コンソーシアム設立を機に、どんな取り組みを進めますか。」

「群馬大にあるICT関連の3センターとコンソーシアムの参加メンバーが連携し、プロジェクトとして推進する。学内のシステムを原則無料で外部が利用し共有できるようにする。例えば独自開発したeラーニングシステムは付属病院で医師の教育に役立てられていたが、手を上げた教育機関に使ってもらえれば、予算が少なくても学びを活性化させることができる。」

「なぜ群馬大で培ったICTの資産を外部に開放するのですか。」

「これまでの日本のウハウウの持ち寄りではなく、これまで培ったICTの資産を外部に開放するのですか。」

「目標の実現に向けての課題は。」

「いかに多くの人たちが使ってもらえるか。世界では海外と比べ大きく遅れている。米グーグルといった『GA』が大事で、どのようか参加団体を増やせるか。『FA』などは誰もが使えるオープンな状態にしたい。これを機に、人を集めてビジネスに拡大につなげた。日そこで群馬県内を問わす、県外の自治体や企業、学術機関、教育、医療などにも幅広く参加を募る。県内にとどまる話ではない。」

「企業からは新卒の学生が一人前に育つまで3年かかるとの声がある。本来、大学が教育すべきことを怠って来た結果だと思う。外生の質の向上につなげる部企業などと一緒に行われるだろう。」

記者の目

海外と比べれば日本のICTは10年の周回遅れ。かつてのモノづくりの成功体験はICT分野にとつて成長の妨げにさえなる。浅尾副学長はICT分野において、学内の資産をできるだけオープンにする必要性を訴える。変化の激しい情報化社会に対応するため、まず教育の現場から変わらなければならぬ。

(群馬・松崎裕)

社会変化対応、教育現場から